

オノマトペに関する対照言語学的考察

岡 本 克 人

(人文学部仏文教室)

L'Onomatopée — Une Étude linguistique contrastive

Katsuto Okamoto

はじめに

周知のごとく日本語はオノマトペ (onomatopée) に富んだ言語である。国文法では従来これを擬音語、擬態語さらに擬情語(金田一春彦による)に分類している。オノマトペとは一般言語学的にいえば音象徴の一形態で、語彙論的レベルに存在し、安定したものも、不安定なものもあるが、形態そのものが直接的に、ある印象を喚起する点で他の語彙とは異なった性格を有する。

欧米の代表的な言語のみを念頭において、日本語を眺めると、オノマトペが豊富なことは改めて驚かされる。例えば、十分に客観的であろうとする新聞記事も現場をリアルに描写しようとする、たちまち「ドカン」だとか、「キーン」だとかいう言葉が頻発することになる。しかし読者のほうもオノマトペを待ち受けているようなところがあり、「大きな爆発音がした。」とか「頭上を戦闘機が飛んで行った。」では写真が間に合わなかった記事のような、物足りなさを感じるのである。また次のような記事の場合だと、日本人ならとっさにある程度までどんな種類の音が想像できるわけで、非常に有用な表現であるとさえ言える。

「…また、森永製菓に届いた江崎社長の肉声の複製テープには「トン・スー・ジャー」という五拍子のリズム音の繰り返しが入っていた。ダンボールの裁断機の音に似ているが確認できず、…」(朝日新聞1988・3・11〔グリコ・森永事件に関する記事より〕)

日本語にオノマトペが多いのは、言語構造上、必要不可欠な機能を担っているからであるらしいことは容易に想像が付く。したがって日本語におけるオノマトペの豊富さは、単に語彙数の問題としてではなく、それが担う機能の重要さとの関連において考察されねばならないだろう。

ところで、オノマトペは何も日本語だけに限られた現象ではなく、想像以上に世界の言語に広く分布した現象であるようだ。たとえば世界中の言語を初めて大規模に収集した言語学大辞典〔1988, 三省堂〕に、次のような記述がみられる。

ヴェトナム語

X. 表象詞 擬声語、擬態語をこの中に含ませることにしよう。副詞に分類することも可能かもしれないが、その意味と特別な機能から、これを特別な品詞としておくほうがよいと思われる。たとえば、擬声語であるアヒルの鳴き声 *quạc* または *quac*, *quạc* を例にとれば、これは「アヒル」そのものをさす名詞になることもあれば、「アヒルが鳴く」という動詞になることもある。

例) *Con vịt kêu quạc quạc*〔単位名詞〕+「アヒル」+「鳴く」+「グワッグワッ」=「(1羽の)アヒルがグワッグワッと鳴く」(副詞的)

con quạc〔単位名詞〕+「グワッ」=「(1羽)のアヒル」(名詞的)

Con vịt quạc quạc mãi. [単位名詞] + 「アヒル」 + 「グワッグワッ」 + 「～し続ける」 = 「(1羽の) アヒルが鳴いてばかりいる」(動詞的)

擬態語についても、まったく同じことがいえ、これらを単なる副詞として扱うのは不十分であると思われる。(p.782)

筆者はヴェトナム語について知るところは何もないが、この記述を見る限り、日本語のオノマトベとの共通性が強く感じられる。すなわち「太陽がキラキラ照りつける。(副詞的)」, 「夏は太陽のキラキラがかなわない。(名詞的)」, 「太陽がキラキラする。(動詞的)」etc.

アイヌ語

CVCの重複に -se, -ke 「～という」が、CVCVの重複に -k が接尾してできた、擬声擬態の動詞——くり返される音や状態を、同じ音素連続の反復によって写したもので、「～という」を意味する接尾辞 -se, -ke は、その全体について、これを動詞化している。-k は、語源的に -ke と同じもので、母音のあとで ke の e が落ちたものと考えられる。

karkarse 「ころころころがる」: kar-kar-se

toktokse 「ドキドキ脈うつ」: tok-tok-se

tokse 「脈うつ」

tetterke 「ピョンピョン跳ぶ」: ter-ter-ke (/r/+t/→/tt/)

terke 「跳ぶ」

purpurke 「ブクブク涌き出る」: pur-pur-ke

paraparak 「大声で泣きわめく」: para-para-k (p.66)

一般的に言って、語根重複 reduplication が多用されるという記述があった場合は、その言語は音の象徴性に対する依存度が高いと考えられるので、オノマトベが多いという推測が可能であるがアイヌ語に関しては間接的であるがオノマトベが豊富であるという報告が別にある¹。〔この意味でタイ語もオノマトベが多い可能性がある。後述の 'The World's major languages' 中の説明で reduplication の記載がある。〕

アフリカの諸言語

3. 10 表意音

3. 10. 1 研究のあらまし 日本語の擬声語(擬音語)や擬態語に当たる品詞は、ニジェール・コンゴ語族とナイル・サハラ語族の全体、および、アフロ・アジア語族のチャド語派に広くみられ、所属する単語数もかなり多い。たぶん、この品詞を欠くのは、アフリカでは、コイサン語族だけであろう。(以下略) (p.364)

3. 10. 10 間投詞的表意音 (interjective ideophones) この種の表意音は、数限りなくある。

例) イグボ語:

ɲwòp ɲwòp ɲwòp 「かあかあ」

tùrú tàá tùrú tàá 「ころころ, ころころころ (蛙の鳴き声)」

cáká fòm 「ばん (銃声)」

kìmòm 「どおーん (大砲の音)」

wéréré 「するする (蛇が道を横切るさま)」

tùwà, tùwà 「びしっ, びしっ (鞭打つ音)」 (p.366)

紙面の都合もあるのでアフリカの諸言語についてはイグボ語の例しか引用しないが、アフリカには実に1,827の言語があり、上記のコイサン語族に属する141言語を除いても膨大な数であることにあらためて注意を喚起しておかねばならない²。これらの言語に表意音が独立した品詞として存在

するのである。

また小規模ながら世界の代表的言語を手際よく記述した 'The World's major languages' には次のような記述がある。

タミール語

Onomatopoeic words (*olikuRippu*) are so numerous in modern standard Tamil that they fill an entire dictionary. Such words generally represent a sound and are syntactically joined to a sentence by means of the verb *eNa* 'say', e.g. *kācu ṇaṅ eNRu kīzē viṇuntatu* '(the) coin, fell, down, with, (lit. saying) a clang;', *pustakam top(pu) eNRu kīzē viṇuntatu* '(the) book, fell, down, with, (lit. saying) a thud;'. Many occur reduplicated, e.g. *muṇumuṇu* 'murmur, mutter', *ṭoṇu-ṭoṇu* 'sound of beating drums'. (p.743)

タミール語は大野氏の日本語との比較によって近年その名をよく知られるようになったが、ドラヴィダ語族の代表的な言語である。すなわちインドの言葉であるが、印欧語民族到来（紀元前千年ごろ）以前より存在する土着の言語である。

以上の言語は言語的系統からいって、互いに全く無関係の言語であるからオノマトペは各言語に初めから独立して存在したはずである。このほか間接的な報告ではあるが韓国語、マレイ語、中国語もオノマトペが豊富であるらしい³。

こうして見ると、どうもアジア・アフリカの相当広い範囲にわたってオノマトペを豊富に有する言語が分布しているように思える。このことは単にオノマトペの分布ということだけではなく、オノマトペを多用するような構造をもつ言語タイプの広い分布を思わせるのだが、このような大問題は別としても、少なくとも日本語が一般に信じられている（欧米の主要言語と比べて）ほど特殊ではないことは考え得るのである。

以下において、オノマトペの多い日本語とオノマトペのきわめて少ないフランス語を中心に、オノマトペ及びそれと関連した言語構造の、対照言語学的考察を試みる。

1. オノマトペと言語類型

まず理論の枠組みとして、オノマトペと関係してくるはずの、それぞれの言語の類型について少し考えてみたい。「犬がワンワンほえる」と言わないと、いわば気のすまない言語と、*Le chien aboie*. で、すます言語では根本的に違った側面があって、それは語順や語彙の差だけで説明出来ることではなさそうである。また、もちろん単に習慣の差などですませることもない。それはそれぞれの言語が事実をどのように料理してことばの皿に乗せるかという問題とかかわっている。

日本語のオノマトペについて、大野晋氏は『日本語の文法を考える』（1978）の中で次のように述べている。

「この二つの表現法〔擬音語と擬態語〕は、言ってみれば物事を理性的に分析的に表現する、あるいは普遍的な概念によってとらえるというよりも、むしろその物事の全体の形・印象を分析せずに、そのままひとまとめに受けとり、それに感覚的に反応し、感覚上何らかの脈絡のある言語の音声と結びつけ、物事から受ける感覚をそのまま言語の中に持ち込むという表現方法である。」(p.68)

「オノマトペアの表現は、物の状態を純粹に客観的に見て、自分自身と切り離して対象化して扱うものではなく、どこかで自分自身の情意や感覚と対象とを融合させ重ね合わせ、未分化のまま

言語化してゆく表現法だということである。」(p.71)

この未分化のまま言語化しようとする態度こそは明らかに日本語が豊富な(あるいは場合によっては過剰ともなるだろうが)オノマトペを有する土壌となっている。『和英擬音語・擬態語翻訳辞典』(1984)はなかなかの労作であるが、いそいで書かれたらしいやや物足りない「はしがき」にも、それは「どうも、このオノマトピア表現〔擬音語・擬態語〕が、日本語のアルファであり、オメガであるのではないか、と編者には思えてしかたがない。」と、直感的印象として述べられている。

オノマトペの説明とは無関係に書かれたものであるが、上記の大野氏の分析を英語との比較によって徹底的に推し進めた著作としてとらえることが出来るのは池上嘉彦氏の『「する」と「なる」の言語学』(1981)である。池上氏は意味論的な側面から出て来る言語の二類型に着目し英語と日本語を対照的に研究し、前者を「する」的な言語、後者を「なる」的な言語と呼んでいる。「する」的な言語とは、西欧の言語に見られるように、動作主が主語となり、動作をする、という形で出来事なり過程が示される言語をいう。これに対し「なる」的な言語とは出来事がまさに出来事として、すなわち行為者に依存するところの動作としてではなく、それ自体として表現される言語のことをいう。またこのことと関係する重要な概念は「もの」と「こと」である。「もの」とは個体中心の見方であり、「こと」とは全体的状況中心の見方である(p.257)。日本語の場合「もの」は「こと」のなかに包みこまれる傾向があるが、英語は逆に「もの」を「こと」から取り出して見せる言語である(p.258)。そして「こと」は「もの」を全体の中に融解しているがゆえに、〈変化〉の様相においてとらえられたときに「なる」に結び付いていく(p.260)。例えば「結婚することになりました」においては「もの」としての当事者は出来事全体の中に埋没し、あたかも結婚という「こと」が自然発生的に「なる」かのごとくである(p.198)。このことは英語の「する」(we are going to get married)と対蹠的である。

以上が、筆者なりに多少パラフレイズしたが、池上理論の要点である。

さて本論で問題となるフランス語は「する」的言語であるか、「なる」的言語であるか、と問われれば、言語の系統からいっても、英語に近い訳で、「する」的言語に分類されるだろう。しかし二者択一を離れてフランス語が本質的に「する」的言語、DO-language(池上氏の用語)かと問い直してみると、どうも違和感が残る。この違和感は「する」という日本語や‘do’という英語の語彙としての意味に惑わされて生まれた錯覚ではなさそうである。池上氏が英語が典型的な‘DO-language’である(p.283)とのべるからには、典型的でないものもあるわけである。残念ながら今、この違和感のよってきたところを詳細に分析する余裕をもたないので、これは別の機会に譲ることにして案描にとどめ、眼目となるオノマトペと関連してくる局面のみに限って、例を挙げ、それに従った筆者なりの類型を立てておきたい。川端康成の『雪国』の冒頭を例に取り上げよう。

(1a) 国境の長いトンネルを抜けると雪国であった。

(1b) Un long tunnel entre les deux régions, et voici qu'on était dans le pays de neige.

(1c) The train came out of the long tunnel into the snow country.

(1b)と(1c)はそれぞれ(1a)の仏英訳であるが、この三文を比べるとずいぶん違った構造をしている。これら三文は同じ状況を三通りにとらえていると考えることが出来るが、対比によって浮かび上がってくる特徴は次のようなものである。

まず日本語の原文(1a)であるが、これは(汽車に乗った)主人公の、というより主人公と一体化しているはずの読者の周囲の状態が変化したのである。「雪国であった」は欧米のものにとらえかたに引きずられると、一見、地理的な場所の指示のようであるが、この句のもつ本当の意味合

いはそうではない。むしろ、「春であった」とか「病気であった」と同類の、状態に近いものである。文学的価値を今、問題にせず、「なる」を用いて変形をほどこすと、「トンネルを抜けると雪国になった」という日本語として十分許容出来る文が出来る。これは「春であった」「病気であった」が「春になった」「病気になる」に変わり得ると平行した現象である。池上氏は、

- (2) 今ハ武蔵ノ国ニナリヌ。コトニヲカシキ所モ見エズ。
- (3) 関山ヲモウチ越テ、大津ノ浦ニナリニケリ。

という例を挙げ(『日本国語大辞典』による)、日本語では<状態の変化>を表す動詞(この場合はナル)が<場所の変化>を表す動詞に転用されることを指摘している。それだけ日本語ではナルが強いわけだが、池上氏によると「不連続な個体が場所を移動するという典型的な<場所の変化>に関してすら、それを<場所の変化>としてではなく、<状態の変化>として捉えるという可能性が十分考えられる。(p.255)」という。(1a)はこの理論にあてはまる例であろう。したがって(1a)は構造的には(2)や(3)のような場所+ニ+ナリヌという日本人好みの表現をふまえ、場所の変化よりもむしろ状態の変化を伝えるものと思われる。『雪国』が良いのは最初の一行だけ、という人がいるが、最初の一行の価値が否定されないのは、ひとつには上記の理由により日本人の心性とよく合うのでないか、と考えられる。

(1b)の仏訳は凝縮した構造をもち(Un long tunnel entre les deux régions), 急速な場面展開が行われているが(et voici que), とどのつまり、徹頭徹尾論理で描かれている。二つの地方の間には長いトンネルがあること、ヒトが雪国にいること、そしてこの(後者)の事実は今、ここに在ること。これらの論理関係が(1a)の状況を示す。ここでは場所の変化すら論理関係に置き換わっているのである。

(1c)の英訳では汽車という動作主がトンネルから出て雪国に入ったのである。これがすべてと言えはすべてである。この例文は中島文雄氏の『日本語の構造』(1987)でも扱われているが、氏が説明のために用いた英訳からもう一度日本語に直訳したのも「汽車は長いトンネルを出て雪国へ入った。(p.4)」となっている。out of と into という動作的な前置詞が二回も用いられていることにも注意しなければならない。したがって(1c)の特徴は動作が中心になっているということであり、位置の移動が(1a)の状況を示している。

ここで以上をまとめると、このような図式が出来る。

日本語	状態の変化
仏語	論理関係
英語	動作

『雪国』の次の一文も同じように検討してみよう。

- (4a) 夜の底が白くなった。(状態の変化)
- (4b) L'horizon avait blanchi sous la ténèbre de la nuit. (論理関係)
- (4c) The earth lay white under the sky. (動作)

興味深いことにここでも同じ関係が認められる。

(4a)の表現はやや技巧的であるけれども、日本人の耳には案外すんなり入るはずである。それは雪国に来たのだから最初から地面が白いはずであるが((4b), (4c)を参照), このことを目に映っ

た状態の変化としてとらえ、「白くなった」と「なる」を用いたからである。

(4b)の仏訳は‘avait blanchi’と、大過去を用い、時間的關係を論理的に表現している。トンネルのこちら側はすでに白くなっていたのである。

(4c)の英訳は相変わらず動作中心である。白い状態で地面は「横たわっていた (p. 4)」(中島訳)のである。(4b)の動詞はすでに論理的な配置の中で静止しているが、この(4c)の動詞はいくぶん動的である。

以上二例にすぎないが、すでにそれぞれの言語のきわめて特徴的な面がでてくる。

まず、日本語の場合であるが、これは状況を状態の変化として没自我的に描く方法を好む。この態度はオノマトペの豊富さに結び付く。未分化な視点に立ち、論理以前の感覚的なものを使って伝達しようとする、おのずから言語音のもつ象徴性が力をもった存在となる。これは見方によっては、原始的と言えないこともない訳だが、どのような評価が下されようとも、日本語にとってオノマトペは、あるのっぴきならない重さをもつのであって、この状況を面白く描いた次のような文章がある。

「ともあれ、私は「ボンボラサン」なんて長年使ったこともなかったが、帽子のてっぺんにつける丸い房を、「タマ」ともいえず、「フサ」ともいえず、「マリ」「球形」ともいえず、やっぱり口をつけて出てくるのは「ボンボラサン」しかなく、まったく、無意識に出てきたのであった。(田辺聖子『大阪弁おもしろ草子』(p.177))

著者はここでは子供のころに使っていたことばをふと思い出すものだ、という意味でボンボラサンという大阪方言を例に出しているのだが、それはそれとして、このように、オノマトペ的な実感のこもった語彙を知っているときに、もう帽子のタマなどということが出来なくなるところが、日本語らしいところである。日本語では、例えば「雨がひどく降っている」ばかりでは落ち着かず、「雨がザーザー降っている」と言う、何か感覚的に納得してしまうのである。「ひどく」という表現は「少し」などと共に計量的、論理的であるが、「ザーザー」は「シトシト」「ポチポチ」「ザーッ」など無数の感覚のうちのひとつである。

次にフランス語と英語の場合であるが、両者とも<もの>が<こと>から浮かび上がる傾向になる言語である。これは日本語とは逆の態度であり、対象は常に語り手から分離され、分析される傾向にあるから、オノマトペが表現の主要な位置に立つことは出来ない。したがってオノマトペはきわめて少ない。少ないだけでなく、まともな語だとは見なされていないふしがある。

ところでフランス語は構造的に英語に似ていても、上の例でもそうであったように実際の描写のスタイルはかなり違っているが、これを「する」言語と言えるのかどうか。いま命名の問題は別として次のようなことが考えられる。

フランス語の場合、<もの>は<こと>的世界から極度に浮かび上がり、<もの>と<もの>の關係が逆に<こと>を引き上げている。英語の場合も、たしかに日本語に比べればずっと<もの>が屹立していて同じような傾向にあるが、動詞が<もの>と<もの>の關係を時間的にたどってみせるために、フランス語ほど<こと>から離脱している訳ではない。<する>(DO)とは<もの>としての主体が一定時間なんらかの形で動くことである。しかし動きそのものも、動きに付帯している時間を捨象してしまえば、<もの>としてとらえることが出来る。すると残るのは<もの>の關係ばかりである。<もの>の關係とは論理關係である。フランス語のfaireは過去分詞fait「なした、(あるいは)なされた」に変わることによって、同時に名詞fait「行為、出来事、事実」の資格を得るが、これが事態を象徴的に表してはいないだろうか。ちなみに名詞faitはラテン語のfacere (faire)の過去分詞factumから出来た語である。

この違いはアナログ的とデジタル的接近というたとえで説明出来るかもしれない。

針式の時計はアナログ的表示である。たとえば10時7分なら、原理的には短針が10を過ぎていること、長針が1を過ぎていることなど、から読み取られる。この場合、目は針の周囲を巡って、10時7分という結論に達するのである。デジタル表示式の時計では、10と7という数字はそのまま(目には)読み取られるが、10時7分が時刻として本当に理解されるためには、そのあと頭の中で時間的關係が想起されることになる。たとえば10時10分にはまだ3分ある、といったふうに。したがってアナログでもデジタルでも接近法は違うが行き着くところは同じである。

このたとえを用いると英語の場合 *ing* が存在することからもわかるように、動詞は動作をアナログ的に追う傾向が強いといえる。これに対しフランス語では動作に付帯する様々なニュアンスは捨象され、ひとつの抽象化された内容のみがいわばデジタル的に示される。例を見てみよう。

- (5b) Elle chante.
- (5c) She is singing.
- (6b) Elle marchait.
- (6c) She was walking.
- (7b) J'habite ici depuis deux ans.
- (7c) I have lived here for two years.

上の各組は一応意味的に対応はするが、完全な等価物にはなり得ない。(5b) (6b) (7b) のフランス語は動詞が動きに関する相を欠いていて事実の抽象的な核のみが示されている。その核から始めて、彼女が歩き続ける様子、わたしが過去から現在まで暮らしてきた2年間等を思い浮かべるのは聞き手にまかされている。

このような仏英語間の差異はバイイによるフランス語と(同じゲルマン語である)ドイツ語との有名な対照的研究 'Linguistique générale et linguistique française' を思い浮かばせる。バイイは次のように述べる。

Quelle est son importance dans l'une et l'autre langue? En allemand, elle est énorme, et beaucoup moindre en français, où l'expression verbale recule devant l'emprise croissante du substantif. (p. 346)

Le verbe allemand trace la trajectoire du mouvement et de l'action. (...) / Rien de semblable en français; le mouvement lui-même y est rendu, dans bien des cas, par l'immobilité; (p. 349)

「両言語におけるその重要性はどうか? ドイツ語ではそれは巨大であるが、フランス語では、動詞的表現が実体詞のいやす制覇のまえに後退するので、はるかにちいさい。p. 389」「ドイツ語動詞は運動と行動の弾道をあとづける。(...) / これに類するものはフランス語にはない; 運動そのものさえ、おおくのばあい不動によって写される。p. 393」(小林英夫訳)

最後に、以上をもう一度シェマにまとめてみると次のようになる。

日本語	状態の変化	こと	アナログ
フランス語	論理関係	もの	デジタル
英語	動作	もの	アナログ

この表を見れば、重点を状態の変化に置くということは、〈こと〉をアナログ的にたどることであり、論理的関係に置くのは〈もの〉をデジタル的にとらえること、動作に置くのは〈もの〉をアナログ的にとらえること、であるのが理解されるだろう。

2. オノマトペの翻訳

単純に考えても、日本語にオノマトペが多く、フランス語、英語に少ないということは、日本語から仏英語に翻訳する際に、オノマトペは何かほかのものに置き換えられねばならない、ということである。それがどう処理されるかを見ることは、すなわちその言語の性格の一端を見ることにもつながる。前節において設定したシエマを踏まえて、オノマトペの翻訳例を検討しよう。

(8a) わたくしたちは狭い待合室の片隅に並んで坐りました。そしてジロジロとみる田舎の娘や老人の視線を避けながら、わたくしは小さい声で切なげに言いました。(『天の夕顔』p.133)

(8b) Tout en cherchant à éviter les regards indiscrets que nous jetaient des vieillards et des filles du village, je l'implorai tout bas: (p.137)

(8c) Avoiding the eyes of country girls and old folks who looked at us curiously, I said in a low voice beseechingly, (...) (p.136)

「ジロジロとみる」とはどういうことだろうか。これは、見る側であれ見られる側であれ、日本人にとっては目の動き、色、その時の心の状態まで感じられる表現であって、ジロジロという音があつても概念以外の何物でもないが、あえて論理的な説明を求めるとどうなるだろうか。『擬音語・擬態語辞典』(浅野鶴子編)には「じろじろ」の【意味】として、「無遠慮に、繰り返し、繰り返し、ながめ回すようす。」とあり、【類義語】の項には、「「じーっ」は、視線をそらさず、見つめ続けるようすで、見つめる対象は何でもいいが、「じろじろ」は、人間および人間に付属するものである。「じろじろ」は、何度も視線を当てて無遠慮に見るのである。」と、適確な説明がしてある。

(8b)では les regards indiscrets を jeter する、すなわち感覚、状态的であった「ジロジロとみる」は完全に分析され「無遠慮な視線を投げかける」という風に論理的になっている。つまり上記辞典の解説のとおりである。

ついでながら、上の「じろじろ」の類義語ともうひとつ「まじまじ」が挙げられているが、この項には「「じろじろ」は繰り返して視線を送るようすであり、見つめられる人間の不快感を含んでいるが、「まじまじ」は視線をそらさない表現であり、感情的な含みはない。」とあり、これもまた(8b)の訳に合致する。

ところで、les regards indiscrets という訳はこれでいいとして、この登場人物二人が純然たる日本人であるにもかかわらず、なにか西洋人のような感じがしてしまうのは何故だろうか。それはどうやら、背後の文化や習慣が関係しているかららしい。確かにじろじろ見るといのは他人を無遠慮に見ることかもしれない。しかしその無遠慮が、自分とは異質の人間だと感じられる場合日本では結構許容されて居るし、異質の人間として他人の中に入ろうとする人は、もう初めからじろじろ見られるのを覚悟の上である。したがって「見詰められる人間の不快感」といっても、日本人の場合(8a)は具合の悪さである。これに対し、たとえばフランスで愛しあっている人間が(たとえそれがこの小説のように若い男と人妻らしき女性であっても)じろじろ見れば、それは indiscret, 見る側が社会のルールを心得ていないことになろう。興味深いことに上記辞典には「じろじろ」の項に「外国人は、田舎へ行くとじろじろ見られて落着かない。」「まじまじ」の項に「はじめて見る外人の顔を、幼い子はまじまじと穴のあくほど見つめていた。」という例文が挙げられている。

これは偶然ではあるまい。

(8c) の英訳は *looked at us curiously* と訳してある。日本語の「ジロジロと」(副詞) + 「みる」(動詞) と構造的に同じで *look at* (動詞) + *curiously* (副詞) と、副詞が動詞を修飾する形になっている。*curiously* はジロジロと違って説明的であるが、あくまでも動作がどのように行われたかを描くことに主眼があり、フランス語ほどの論理的分析を行わない。

(9a) [銃で撃った小鳥の] 小さいその姿が、何とも可憐で、わたくしが腹で押えようと、食べたばかりの寄生木の実が、プツッとそのまま幾らでも出てきたりしました。(『天の夕顔』 p. 209)

(9b) *En pressant leur ventre, je voyais sortir de leur bec, l'une après l'autre, les baies qu'ils avaient avalées.* (p.217)

(9c) *When I pressed them at the stomach, quite a number of those fruits popped out in their original forms without being digested at all.* (p.214)

(9a) の「プツッ(と)」は我々日本人には何でもないが、『擬音語擬態語辞典』によれば、「ごく小さな粒状の突起や穴がたった一つあるようす。急に現れるようす。」をいうのであり、なかなか複雑な内容をもつ語である。要するに実がこねれずに出て来たことは次に書いてあるのだから、論理からいうと不要な語だが、日本語としては、ここでは省くことは出来ない。感覚面から状況を分らせるということがぜひとも必要だからである。

(9b) は上の論理に基づいて、直接対応する語彙がない。飲み込んだところのその実が次々に出て来たのであるから、その実は「プツッ」としているに決まっているのである。フランス語は一般に動作に付帯する細かい状況を述べるのを嫌うようで、バイイによっても '*les verbes français présentent l'action sous une forme abstraite;*' (p.346) 「フランス語の動詞は行動を抽象的形式のもとにしめす。(小林英夫訳) p.389」と指摘され、'*nous rendons le plus souvent «(nach der Stadt) gehen, fahren, reiten» par aller, toutes les fois qu'une précision n'est pas indispensable.* (p.347) 「われわれはたいていのばあい «(nach der Stadt) gehen, fahren, reiten» 「(町に)歩いて、乗物で、馬でゆく」を *aller* ひとつで写す、くわしい区別が不可欠でないかぎりは。(p.389)」のような例が挙げられている。これは英語と比べても同じことである。

(9c) は *in their original forms* で説明的に述べ、*popped out* は「プツッと出る」の感じを表していて、形の上では忠実な訳になっているが、根本的に違うのは日本語が主観的印象に傾いているのに対し、英語は対象との距離を設けて動作の種類をきちんと見分けている点である。

(10a) 大阪の方の町の灯がチラチラと海の向うに見えました。(『天の夕顔』 p.33)

(10b) *De là on voyait la mer, et au delà Osaka où s'allumaient quelques feux.* (p.37)

(10c) *The city lights of Osaka flickered here and there beyond the sea.* (p.36)

チラチラとは「小さな弱い光りが、繰り返しひらめいたり、またたいりするようす。またそのように感じるようす。(『擬音語擬態語辞典』)」である。

(10b) はチラチラに直接該当する語はない。夜、海の向こうに幾つかの灯 (*quelques feux*) がついていれば、それは自然に目にチラチラ映ずるものである。したがってここでも論理の核だけが示される。

(10c) は *flickered here and there* という、時間的推移まで感じさせるほどの動きについての忠実な表現をとっている。

以上のようなアプローチの相違は前節に述べた各言語の特質に根差す現象で翻訳者の文体からく

るものではない。念のために違う作品と翻訳者から例を挙げておこう。

- (11a) 「見ていただいていいわよ。どうぞ。」と少し投げ出し気味に言って、ぽいと財布を母の膝の前へ投げた。(『山の音』 p.27)
- (11b) Elle lança son porte-monnaie sur les genoux de celle-ci. (p.23)
- (11c) (...) and slapping the purse down at her mother's knee. (p.24)
- (12a) 蛇は頭を少し持ち上げて、赤い舌を出したが、テルの方は見向きもしないで、するする動き出した。勝手口の敷居ぞいに這って行った。(『山の音』 p.188)
- (12b) (...) elle se mit à ramper, en longeant le seuil de la cuisine. (p.151)
- (12c) (...) then turned and slithered off past the kitchen doorsill. (p.188)
- (13a) 「どう? ひょこひょこ起きない方がいいのじゃないか。」と信吾は机の前に坐った。(『山の音』 p.202)
- (13b) "Comment te sens-tu? N'est-ce pas un peu léger de te lever autant?" (p.162)
- (13c) "How are you? You shouldn't be jumping out of bed all the time." (p.175)

これらの例においても同じ対比がみられ、日本語のオノマトペはフランス語では単純な動詞に還元され、英語では細かく動作の軌跡が描かれている。(13a)の「ひょこひょこ」は単に動作を表すだけでなく、軽はずみだという意味合いがあって(『擬音語擬態語辞典』)訳しがたい語であるが、そのところを、フランス語では直截的に léger という言葉を出して(論理的判断)軽はずみに重点をおいているのに対し、英語では動作の方に重点を置いて、それを注意する形になっているのが興味深い。

今度は仏英語から日本語への翻訳のケースを考えてみよう。この場合日本人にとって、扱いなれなくて容易なはずのオノマトペにかえて苦しまれることになる。すなわちフランス語の論理にしたがって逐語的に訳すべきか、あるいは感覚的に把握してそれを不明なオノマトペとして訳すべきか、厳しい選択をせまられる場合があるからだ。しかしまた自然にオノマトペを使わざるを得ないような場合もあって、『翻訳仏文法(下巻)』(鷺見洋一)に、次のような文章が挙げられている。

- (14a) Arrivés au palier du premier étage, M^{me} Hogier frappa à la porte de son frère. J'entendis quelqu'un se lever et le bruit d'un grand livre qu'on faisait retomber à plat sur une table, puis une voix que je reconnus dit: «Entrez.» ('Amours et vie d'une femme')
- (14b) 二階の踊り場までくると、オジェ嬢は兄の部屋の戸を叩いた。誰かが立ち上がり、大きな本をテーブルの上にバタンとほうり出す音がしたと思うと、聞きおぼえのある声があった。「どうぞ」。(p.85)

鷺見氏の指摘のとおり、ここはオノマトペを使わないと「隔靴搔痒の感をまぬがれない」。なぜ場合によっては隔靴搔痒の感になるのか。これは、やはり池上理論を基礎として英語と日本語の発想の対比を翻訳の立場から検討した『英語の発想』(安西徹雄)の中の「(日本語は)主観の裏うちがなければ、表現は表現として完結しない(p.121)」ということばがよくそれに答えているように思う。また、鷺見氏は安易にオノマトペに頼る危険性にも注意を与え、次のような訳は劇画調だという。

- (15a) Tous les quarts d'heure, les lourdes voitures jaunes s'ébranlaient dans un grand tumulte et descendaient la petite rue Guichard avec un fracas de tonnerre. ('La Révol-tée')

(15b) 15分ごとに、黄色の重い馬車がガタガタ揺れながら、狭いギンシャル街を轟々と走り下りてくるのだった。(p.86)

いずれにしても翻訳の際に、オノマトペを使うか、使わないか、また使うとしてどんなオノマトペを用いるかは、案外難しいものと見え、珍訳に出くわすこともある。

(16a) 'If I could only get out and look at the damned thing! he said, exasperated. And he sounded the horn stridently. ('Lady Chatterley's lover', p.195)

(16b) 「僕がおりて機械をしらべられさえしたら！」と彼が腹をたてて言った。そして彼はぎいぎいと警笛を鳴らした。(新潮社版, p.296)

(16c) 「自分で降りて調べることができりゃなんてことないんだ、こんなもの。」クリフォードはいらいらして、警笛をけたたましく鳴らした。(別宮貞徳訳 p.111)

(16c)は別宮氏によって訂正された訳であるが、「ぎいぎい」鳴る警笛はたしかに珍しい。『擬音語擬態語辞典』によると、「ギーギー」とは「かなり堅い材質の物体が、たわんだり、ゆがんだり、または、こすれ合ったりして発する音の連続」をいうのである。しかしこれは辞書をひくまでもないことである。では何故このような間違いが生じたのか。答えは簡単である。手元の小さい英和辞典をいくつかひくと、stridentはすべて「きいきいう」と書いてある。『小学館ランダムハウス英和大辞典』をひくと、これに加えて「ぎいぎい」も書いてある。

筆者が見付けた例には「ブンブン」鳴くヤマウズラがいる。「ヤマウズラやキツツキが森の中でブンブン鳴いたり (were booming), コツコツ音をたてたりしていた。」(『野性の呼び声』, p.169) 訳者自身の手によって、boom=make a deep, prolonged and resonant sound という注が付されているにもかかわらず、こんな訳になったのは、やはり上記と同じで、どの辞書にも「ブーン」と書いてあるからだろう。

このような誤解がなぜ生じるのか、さらに一步突っ込んで考えてみると、それは日本語のオノマトペによる音の把握方法と欧米の音の把握方法がまるで違うのに、犬=chien=dog というようなある程度の対応関係があると錯覚するところにあるのと、もうひとつは一見自由に見えるオノマトペが案外厳密に使われていることに気付いていないからだ。

さてしめくりとして『山の音』の中の「手答え」に関する訳の対比について述べる。この「手答え」は板坂元氏によって日本人の心性を表すキーワードとして取り上げられたものである。(『日本人の論理構造』)

(17a) 蟬が飛びこんで来て、蚊帳の裾にとまった。

信吾はその蟬をつかんだが、鳴かなかった。

「おしだ。」と信吾はつぶやいた。ぎゃあと言った蟬とはちがう。

また明りをまちがえて飛びこんで来ないように、信吾は力いっぱい、左手の桜の高みへ向けて、その蟬を投げた。手答えがなかった。(p.9)

この最後の部分について板坂氏は英訳では

(17b) He felt nothing against his hand as he released it.

と、蟬が手から離れる際の感じだけを述べていることを指摘し、(日本人にとって)手答えとはそういうものではなく、「もし蟬が何かに当って音がきこえたなら「手答えがあった」ことになる(p.108)」と、述べている。

すなわち、桜の葉に当たってカサッと音がしたり、あるいはまた思いがけず蟬がジジッとでも言えればいいのであろう。したがって日本人の求める手答えとはオノマトペが表すような感触の世界なのである。大変興味深いことに同じ箇所をフランス語はこう訳している。

(17c) mais il ne lui sembla pas avoir visé juste. (p.9)

手答えがないとは、日本人にとっては行為の結果を感覚的に把握出来ない、つまりそういう意味においてある種の不安定感がある、ということであるが、フランス人にとっては、そんなことは重要な問題でなく、この場合だと、まずは、投げた行為とその結果の関連、すなわち論理的な道筋が分かれば十分なのである。ここでも、状態、論理、動作に力点を置く、各言語の個性が現われている。

3. 音に対する態度

オノマトペが重要な存在である言語と、そうでない言語は、音そのものに対する関心や態度が違ふことが、予想される。次の例をみてみよう。

(18a) そういう嵐の音の底にごおうっと遠い音が聞こえて来た。

汽車が丹那トンネルを通る音だ。そう信吾にわかっていた。またそうにちがいがなかった。

汽車はトンネルを出る時に、汽笛を鳴らした。(『山の音』p.123)

(18b) ; des profondeurs de la tempête se rapprochait un grondement lointain.

“C'est un train qui traverse le tunnel de Tanna”, pensa-t-il; (p.99)

どちらもごおうっという音を聞いて汽車が通っていると判断しているのに変わりがあるはずもないが、表現としては、日本語ではそれは「汽車が通る音だ」と音に重心があるのに対し、フランス語ではそれは汽車であると、音の発生源に重心が置かれている。

同様の例で、

(19a) 犬の声か人間の声か、ちょっと分らなかった。はじめ信吾は犬のうなり声だと聞いた。(『山の音』p.144)

(19b) Mais s'agissait-il d'un homme ou d'un chien? Il ne parvint pas à le distinguer. D'abord, il prit ce bruit pour le hurlement d'un chien. (p.115)

(19a)は「声」(すなわち音であるが)を問題にしているスタイルをとっているが、(19b)においては il s'agit de (+不定冠詞+名詞) という、焦点をしぼりこむ表現が、犬かそれとも人間なのかというふうに論理的な主体を求める恰好になっている。

またこのところはフランス人が音をどう分析するかがよく現れていて面白い。日本語の方はすべて「声」で、声そのものが声を出す主体の体现者ですらあるが、フランス語ではまず人や犬など声とか音を出す主体があり、その音は分類され(この場合は bruit とされる)さらにそれがどんな種類の音なのか類別される(この場合は hurlement)。

ここで日本語、フランス語の、音そのものの呼び方に注目してみよう。

まず「声」であるが、日本語では声という言葉人間の声、動物の声、虫の聲のほかには鐘声というふうに、無生物にも使う。波の声、松の声、秋の聲もある。

フランス語では 'voix' を人の声と動物(犬、鳥)の鳴き声に用い、さらに鐘の音、風の音、波の音にも用いるので、単純に意味範囲だけ見ると案外似ているのであるが、実際の使用状況はまるで違ふようである。くわしい調査は別の機会にゆずりたいが、おおまかな印象では、日本語ではあ

種の受動的態度で自然が出す音を聴き入る際に声というようである。「聴き入る」というのは説明しがたい概念であるが、「こと」を「こと」として、全体的に受け取り、何らかの印象や意味を感じ取っているときにいうのであろう。これを象徴的にあらわしたものと言えば例えば、祇園精舎の鐘の音が思い出されるが、「私は、『源氏物語』全編の上に、祇園精舎の鐘の音が、いんいんと響きわたっているのをおぼえた。」(『現代の文体研究』安本美典⁶, p.397)というような表現は、日本人には容易に分かる感覚であろう。

それに対しフランス語では *voix* は原則的に人間が発するものであって、動物でも犬や鳥というヨーロッパでは人間に非常に近い存在としてとらえられているものときには *voix* が出やすいが、その他の動物はそうでもないのではないか。またその他、無生物に *voix* を用いるときも、それは一種の擬人法ではないだろうか。とすると、*voix* はあくまでも人間中心にとらえられている概念である。さらに日本語では動物について語るときに頻繁に声、鳴き声という語を使用するが、フランス語では分類済みの音(上記の *hurlement* のような、[*hurlement* は呻き声でもあるし、風などの唸る音でもある])として表現されることが多いようだ。

次に音という言葉についてみると、日本人はどんな音でも音と呼ぶ。ヴァイオリンの音、笛の音など楽音は勿論だが、道路工事の音、椅子のきしむ音、蛍光灯のジーッという音など騒音も音である。雑音という言葉はラジオに雑音が入る、というふうに何かに聞き入ろうとするときにじゃまになる音にしか使われない。

フランス語では *son* は音として純粹だとみなされたものであって、他はみな *bruit* である。*son* は人間の理性にかなうものだとすると、*bruit* はそれを乱すものである。おもしろいのは映画・放送等の音響効果のことを *bruitage* といい、それを扱う係のことを *bruiteur* という。辞書には擬音係と意味が付してあるが、直訳すれば雑音係ということになる。

日本語が声や音と対時的に接するのでなく、むしろその中に身を置いて、味わったり、状況判断をする傾向は、聞こえて来る言葉をそのまませりふとして文章に挿入しようとする強い傾向の中にもあらわれている。

『雪国』の最初の部分にある次のせりふは仏英語とも訳出されていない。

(20a) 娘は窓いっぱいになり出して、遠くへ叫ぶように、

「駅長さあん、駅長さあん」

明りをさげてゆっくり雪を踏んで来た男は、(…)

(20b) *Penchée à l'extérieur autant qu'elle le pouvait, la jeune personne appela l'homme du poste à pleine voix, criant au loin.*

L'homme approchait, (…) (p.15)

(20c) *Leaning far out the window, the girl called to the station master as though he were a great distance away.* (p.3)

ここは日本人なら、ぜひとも呼び声を聞きたいところであるが、仏英語にないのはなぜか。英語の場合、大勢いる人の中で特に駅長だけを目指して呼ぶ言い方そのものがないからだ(『日本語への希望』p.22)、とネイティブ・スピーカーによる情報をもとに金田一氏は分析している。筆者がフランス人に同じことを聞いてみたが、困り果てた様子で、結局、はっきりした答えは得られなかった。してみると確かにそういうことがこの場合はあるのかもしれないが、(駅長の名前は明らかでないので名前を使って呼ばせることも出来ないし)、もっと根本的な問題としてフランス語は、そして多分英語も論理講成にとって、無駄な音は写さない傾向が強いということがあるからではないだろうか。例えば、『山の音』で、他人を呼んでいるところを拾ってみよう。

- (21a) 「菊子, 菊子さん。」と保子が呼んだ。
「こちらにもお密柑を少しちょうだい。」(p.114)
- (21b) “Kikuko! appelait Yasuko. Voudrais-tu nous apporter à nous aussi des oranges?”
(p.92)
- (22a) 「信吾さあん, 信吾さあん。」というよび声を信吾はゆめうつつにきいた。
そう呼ぶのは, 保子の姉しかない。
信吾はしびれるようにあまい目ざめだった。
「信吾さあん, 信吾さあん, 信吾さあん。」
その声は裏の窓の下で, そこへ忍んで来て呼んでいる。(p.124)
- (22b) “Shingo-o-o! Shingo-o-o!” Il s’entendit appeler, dans son demi-sommeil. (...) Ce fut un réveil d’une douceur indicible.
“Shingo-o-o!” La voix s’était faufilee sous la fenêtre, (...) (p.99)

(21a)では確かに二回「菊子」という呼び掛けがあったのである。それが(21b)では一回に減少している。(22a)の最初の「信吾さあん」は(22b)で二度繰り返されているが, あとの方はたった一度に削減されている。論理にとっては「信吾さあん」という呼び掛けが繰り返されていることが分かれば十分なのである。

日本語において, このように繰り返されるせりふもうるさく感じられないで, むしろ必要であると感じられるのは, せりふがせりふとして語り手と対峙しておらず, むしろ語り手の体現であるからだ。日本語に, はっきり語法といえるものがないのもそのためである。フランス語では直接語法は, ある主体があるせりふを述べる, という形を取り, せりふは明らかに主体の外側にあつて, 直接目的語に相当する。基本的に主語+dire+《せりふ》で, S+V+Oの構造である。

(23) Jacques m’a dit: “Mon père est un fanatique de golf.”

(24) Jacques m’a dit la vérité.

(23)と(24)は平行した関係にあると考えられる。普通はせりふの方が表に出なければならないことが当然多いわけで, 次の(25a)のように dire はせりふの中に挿入されたり, あるいはまた省かれたりするわけだが, 語り手とせりふの関係は同じである。

(25a) “Moi, je ne suis pas de cet avis, dit Shuichi. Elle n’est pas gentille pour son mari”,
et personne ne le prit pour une plaisanterie. (p.34)

(25b) 「僕は賛成しないぞ。亭主にだけはやさしくない。」と修一が言ったが, じょうだんにもならなかった。(『山の音』p.41)

これに対し, 日本語のせりふはいかなれば副詞的なものである。この副詞的であることは, 形の上では, 「～と言った」, の「と」に現れている。「傲然ともを言う」, 「べらべらとよくしゃべる」, 「すらすらと書く」, 「早々とひきあげた」, などと類似の関係にある。このことは間投詞的な短いせりふをみるとよく感じられる。したがって, 日本語のせりふは独立性が弱く, 地の文との区別はあまりはっきりしたものでなく, 容易にこの間を移行する。せりふとして自立させたいときはかっこがつき, 心の中の印象にとどめたいときはかっこを付けないといった程度であるが, このかっかも書く人の好みによって変わり得る。

(26) 「あっ。」と胸をおさえた。(『山の音』p.144)

(27) (...) しかし目の前のものはっきりしたとたんに, 慈童の毛描きや唇が美しく見えて,

あっと言いそうだった。(p.97)

(28)「はてな？」と信吾は思った。(p.83)

(29) やれやれと信吾は思った。(p.25)

(30)「おしだ。」と信吾はつぶやいた。(p.9)

(31) ゆるしてやれよと、菊子に言うように、信吾は口のなかでつぶやいた。(p.146)

この実際に口に出したせりふと心の中の一つのせりふ(つまり感情や印象や思考であるが)が未分化であることは、やはり日本語において、オノマトベが頻繁に現れる素地となっているのである。つまり、

(32) 犬が「ワンワン」と鳴く。

は、容易に、

(33) 犬がワンワンと鳴く。

に移行する。あたかもこれは犬が「ワンワン」というせりふを言い、その括弧が取れたかのごとくである。これが冗談でもなんでもないことは、次のような例からも分かる。

(34)「おしだ。」と信吾はつぶやいた。ぎゃあと言った蟬とはちがう。(『山の音』p.9)

(34)の「言う」は決して擬人法などではない。「機械がキーキー言う」などというときも同じで、別に日本人は、西洋でいう擬人法を使っているわけではない。

4. オノマトベの実際

最後に日仏のオノマトベの実際の姿にも触れなければならないが、すでにここまでのにのべてきたごとく、基盤となる言語類型がまず異なり、量も質も違う両言語のオノマトベを同一地平に置いて直接的に比較しても意味のないことである。したがって、それぞれの言語における語彙論的な細部の研究は別の機会をもつことにし、ここでは一般的傾向のみ簡単にふれておきたい。

まず、論理的成熟を求める大人のフランス語にはオノマトベのような未開なものはないことになっていて、文学作品などではオノマトベらしいオノマトベにはなかなかお目にかかれないが、次はその数少ない例である。

(35) Peu après, John entendait:

— Toc! Toc!

Un doigt léger, un doigt de petite fille de dix ans frappait à sa porte. ('Un parfum de jasmin', p.2)

(36) Le moteur fait "teuf-teuf", puis s'éteint. (Sélection, Mars '88, p.182)

(35)と(36)は一見して違うタイプに見えるが、オノマトベが通常の語彙として文の中に入り込めない点で共通している。(36)の faire + "onomatopée" の形は多く見られるが faire du bruit のパターンに沿うものであろう。

それでは、子供や幼児を対象とした文章ではどうであろうか。手元にあまり資料がないので、確証には至らないが、一般的にはオノマトベが現れやすくなるようだ。

(37) :quand on commence à s'amuser, ding ding, il faut aller en classe. ('Cinq contes du petit Nicolas', p.13)

しかし(37)などはむしろ漫画めいたイメージからオノマトベが出ているだけかも知れない。というのは、幼時向けの絵本でもなかなかオノマトベが見付からないからだ。'Les trois petits cochons' (全24頁)ではただ三度、'splash, splash, splash' (p.6), 'toc, toc, toc' (p.13), 'plouf' (p.22)が出るのみである。'Le roi Babar' (全26頁)では一度もオノマトベは出ない。こういったことは誰でも知るように日本語の絵本ではあり得ない。

次に漫画ではどうであろうか。フランス語でもオノマトベは漫画においては大量にもちいられるようで、音の出ない画面の効果音の役目を果たすのは、日本の漫画とかわりはないようだ。手塚治虫の仏訳漫画 'Docteur Black Jack'⁸では高速で走る自動車のエンジン音を WROOM, 白バイのサイレンの音を BWOÛOÛ, ジェット旅客機が飛ぶところを, WHÔÔで表している。

これらの事実は何を物語っているのだろうか。おそらくはフランス語におけるオノマトベとは、あくまでも、添え物の擬音、効果音としての擬音そのものであって、その語の中には、日本人が思い浮かべるほどの重要な意味は無いのである。したがって、擬音語よりさらに高次の使用法である擬態語がフランス語にないのは当然のことである。さらにまたオノマトベが少ないはずのフランス語が漫画になると、堰を切ったように、既製の、あるいはその場かぎりのオノマトベで画面を埋める訳も理解出来る。理性の手を離れた単なる効果音に制限があるはずもない。あるいはまた鳥の声を聞き分けて、何とか文字に写し取ろうとするとき、(西洋人の鳥の鳴き方に対する特別の関心を割り引いて考えても)日本人と変わらない鋭さを発揮するのは、そのときは鳥の声を単なる音として把握しようとしているからであろう。例えば、『フランスの鳥⁹』(森岡照明)によると、pigeon biset (カワラバト)は «ou rou cou», pigeon colombin (ヒメモリバト)は «hoû rou», pigeon ramier (モリバト)は «grou groûh grou grou», tourterelle turque (シラコバト)は «cou-coûh, cou», tourterelle des bois (コキジバト)は «tour tour」と、鳴く。

フランス語では、そもそもオノマトベとは未熟なもので、幼児語に近いものである。それは pipi, caca, dodo, lolo, joujou, tonton, tata, pépé, mémé (例は窪川英水「幼児のフランス語」¹⁰による)のように、いずれはもっと理性的な語に置き換えられねばならない語なのである。それらが理性的な語に置き換えられたとき日本人には、にわかに信じがたい音の分類がなされる。

(38) Quelquefois il sifflait doucement, parce que les arbres aiment bien la musique qu'on fait en sifflant. Ils n'ont jamais peur des oiseaux ni des cigales, ils aiment bien le bruit des sifflements doux. ('Voyage au pays des arbres', Le Clézio, p.8)

(38)において il は少年であるから、口笛を吹いたのであろう。Ils とあるのは木々 (les arbres) であるが、木々が鳥やせみをこわがらないのは彼らが sifflements doux を出すから、ということになっている。鳥の場合なら、耳に快く響くピーピーという鳴き方をするのであろうし、まだ理解出来るが、せみの sifflements を同じ範疇の音として想像するのはなかなか難しい。もっともフランス人にとっては、ラジオの雑音、列車の汽笛、風のうなり、耳鳴り、砲弾の飛ぶ音等、すべて sifflement であるから、鳥と同じように chanter する虫は容易に同類に組み込めるのであろう。

さて、以上のことから察せられるように、そもそもフランス語には日本人が考えるような擬音語、擬態語がないといってよいだろう。辞書に《擬音》などと記載されていても、それはたいがい語源がオノマトベであったというだけのことである。

crailer, vrombir, miauler, cha-cha-cha, etc.

あるいはまた間投詞に《擬音》と付したものがあるが、これも疑問である。

aie, euh, hé, etc.

次に日本語のオノマトベであるが、これはすでに国語学関係方面でかなり研究されているようで

あるし、本稿でも何度か参照した『擬音語擬態語辞典』のような成果もあるので、上記のフランス語との対応という意味で、今回はひとことだけにとどめておく。

日本語の辞書にはフランス語の辞書のように、《擬音》などと、断っていないが、これはひとつには日本語ではオノマトペも立派な語彙として扱われるからであるが、もうひとつの理由はどの語がオノマトペかはっきりしないことも多いからだ。フランス語辞書のような記述方法を取ると日本語の辞書は《擬音》という指示だらけになってしまう。なぜなら日本語の語彙にはオノマトペが語根として忍び込んでいる場合が多く、例えば、「光」と「ピカリ」、「車」と「クルクル」との間には語源的に関連があると推定されている(大野晋『日本語の文法を考える』p.69-70)。同氏によると、サワ・ク(騒く)、ワララ・ク(笑く)、トドロ・ク(轟く)、ササヤ・ク(囁く)などはオノマトペから出来たと考え得る動詞である。

このような造語法は、実は過去の日本語においてのみ存在したのではない。泉邦寿氏は『擬声語・擬態語の特質』で、我々日本人が外来語をオノマトペのようにとらえる傾向があることを指摘し、コレラに対するコロリ(コロリと死ぬ)、プディングに対するプリン(プリンプリンしている感じ)の例を挙げ、さらに、逆にオノマトペが外国語風に聞こえることを利用して、商品名を作る(スカット[清涼飲料水]、ザブ[洗剤])現象にもふれている(p.149)。また、日本人が外来語を好むのはひとつにはオノマトペ的感触を楽しんでいるのでないか、という鋭い指摘がなされている(p.149)。

さらに興味深いのは、上記論文で扱われなかった、漢語とオノマトペの関連を分析した『擬態語の中の漢語』(鈴木修次)である。同氏によると「びょうびょうと犬が鳴く」「りゅうりゅうと槍をしごく」は漢語にみえるが、じつはこれは日本人の創作で、漢語めかしたオノマトペだという。(p.164) たしかに我々は漢語であれ、西洋語であれ、オノマトペとして聞く面をもっている。

このように日本語のオノマトペ肯定の強い傾向は幼児むけの絵本にすでに明確に出ている。絵本にはオノマトペが溢れているが、これはひとつにはオノマトペで感覚的に世界を理解させ、またオノマトペに習熟させようという無意識的な意図が働いているからであって、ただ安易に幼児を喜ばせるためではなからう。意識的にこれを目指して、成功していると思われる絵本のひとつは次のようなものである。

- (39) ゆきが まいにち ふりました。 のはらに やまに ゆきが ふりつもありました。／
ふゆごもりの あなのなか、 くまの かあさんは ふたごの ぼうやを うみました。／
おっばい のんでは くうくう ねむって、 ぼうやは おおきくなりました。／ ある
ひ、 ぼうやは たずねました。「かーん かーんって おとが するよ。 かーん かー
んって なんの おと?」／ すると、 かあさんが こたえました。「きこりが きを
きるおとでしょう。 とおい もりから ひびいてくるの。 でも、 だいじょうぶ。 きこり
は ここまで こないから、 ぼうやは ゆっくり おやすみね」(『ぼとんぼとんはなん
のおと』)

このあと、「ほっほー」(ふくろう)、「しーん」(雪が降って静かだ)、「つっぴー つっぴー」(小鳥の鳴き声)等の音について、熊の親子の会話が引き続いてなされ、そのオノマトペがやがて春が来て、冬ごもりが終わるまでを描写するのである。

このように日本人がオノマトペを幼いときから駆使することを覚え、状況の中に自己の理性や感性を融和させながら成長していくのは、善いも悪いもなく、日本語が根本的にそのような構造をしているからである。「(擬音詞は)言語が本来の機能をもたない、墮落した形であります。」(『文章読本』p.141)とまでいう三島由紀夫も結局は安易な用い方をするな、といっているだけで、たと

えば『金閣寺』の主人公が中学時代を思い出すシーンではオノマトペが連続的に現れる。

(40) (…) そんな若さで、自分の謙譲さの重みをちゃんと知っていた。(p.8)

(中略)

「おい、溝口」

と、初対面の私に呼びかけた。私はだまっただま、まじまじと彼を見つめた。(p.9)

(…)

「何だ、吃りか。貴様も海機へ入らんか。吃りなんか、一日で叩き直してやるぞ」

私はどうしてだか、咄嗟に明瞭な返事をした。言葉はすらすら流れ、意志とかかわりなく、あっという間に出た。

「入りません。僕は坊主になるんです。」

皆はしんとした。(p.9)

ここで用いられているオノマトペは「抽象性を汚し(『文章読本』p.141)」ているがゆえに、本来の機能を発揮しているのではなかろうか。

おわりに

以上、オノマトペをめぐって、オノマトペそのものより、むしろそれのよってきたるところに重点をおいて考察してきた。あえてオノマトペがきわめて多い言語ときわめて少ない言語を比較する意味はおのずから明らかになったのでないかと考える。「はじめに」で述べたように、オノマトペが豊富なのは日本語だけではない。したがって、今後の課題としては、アジア・アフリカ地域の日本語以外の言語の種類とオノマトペの関係も検討してみなければならないだろう。また、それと同時に、言語記号としてオノマトペをどのように位置付けるか、(たとえばバンヴェニストの「言語記号の性質」¹⁴などに立ち戻って)、再検討してみる必要もあろう。おわりに、直接オノマトペとは結び付かないが、(というのはこのアメリカ人は、どんな時にハイク〔俳句〕が出来るか、という質問に答えたのであるから)、日本語でオノマトペが生まれる瞬間を描いたような表現があったので紹介しておく。

*"Yes, I think of it as the moment when you leave yourself and attach yourself to something in nature or something outside of the self. One way of putting it is that you swich from self to the other, and it's in that moment that you put the words together."*¹²

注

1. 大野晋『日本語の文法を考える』p.68.
2. アフリカの言語分類は現在のところ完全なものではない。この数字は執筆担当者、清水紀佳氏の統計による。
3. 大野晋『日本語の文法を考える』p.68. 金田一春彦『日本語』(上), p.255.
4. 雑誌『翻訳の世界』昭和63年4月号.
5. 龍口直太郎訳注、『野性の呼び声』(Jack London, 'The Call of the wild'), 旺文社英文学習ライブラリー⑱.

6. 安本美典, 「現代の文体研究」, 岩波講座日本語10『文体』.
7. 鷺見洋一, 『翻訳仏文法(下)』p.68によるとフランスの漫画にオノマトペが多いことが記されている.
8. 手塚治虫作, ジャック・ラローズ訳, Docteur Black Jack, 雑誌『ふらんす』1984年4月~1985年1月号に掲載.
9. 森岡照明, フランスの鳥, 雑誌『ふらんす』1983年4月~1985年3月号に掲載.
10. 窪川英水, 「幼児のフランス語」, 雑誌『ふらんす』1983年9月号, p.50. なお大人が chouchoute, bonne, doudoune のような語を使うのは精神分析的に退行現象であるという見方がある, との記述は注目に値する.
11. Émile Benveniste, Nature du signe linguistique, in 'Problèmes de linguistique générale I', 1966, Paris, Gallimard.
12. NHK テレビ講座用テキスト『英語会話Ⅱ』1987年8月, p.17.

参考文献

- 1) 浅野鶴子編, 擬音語・擬態語辞典, 第五版, 昭和六十年, 角川書店.
- 2) 藤田孝・秋保慎一編, 和英擬音語・擬態語翻訳辞典, 昭和五十九年, 金星堂.
- 3) 池上嘉彦, 「する」と「なる」の言語学, 1983, 大修館書店.
- 4) 泉邦寿, 擬声語・擬態語の特質, (鈴木孝夫編, 日本語の語彙と表現, 1985, 大修館書店) 所収.
- 5) 鈴木修次, 擬態語の中の漢語, (漢語と日本人, 1979, みすず書房) 所収.
- 6) 金田一春彦, 日本語への希望, 1983, 大修館書店.
- 7) 鷺見洋一, 翻訳仏文法(下), 1987, 日本翻訳家養成センター.
- 8) 中島文雄, 日本語の構造, 1987, 岩波書店.
- 9) 亀井孝・河野六郎・千野栄一編著, 言語学大辞典(第1巻), 1988, 三省堂.
- 10) 岩波講座「日本語10」『文体』, 1977, 岩波書店.
- 11) 三島由紀夫, 文章読本, 昭和四十八年, 中公文庫.
- 12) 安西徹雄, 英語の発想, 昭和五十八年, 講談社現代新書.
- 13) 板坂元, 日本人の論理構造, 昭和四十六年, 講談社現代新書.
- 14) 大野晋, 日本語の文法を考える, 1978, 岩波新書.
- 15) 金田一春彦, 日本語(上), 1988, 岩波新書.
- 16) 小学館ランダムハウス英和大辞典, 1973, 小学館.
- 17) 国語大辞典, 昭和五十七年, 小学館.
- 18) Bernard Comrie (ed.), The World's major languages, 1987, London, Croom Helm.
- 19) Charles Bally, Linguistique générale et linguistique française, 1965, Bern, Francke Berne.
- 20) シャルル・バイイ, (小林英夫訳), 一般言語学とフランス言語学, 1970年, 岩波書店.

例文引用文献

- 1) 中河与一(原作)・太田朗(英訳)・福田陸太郎(仏訳), <国際版>夕顔, 昭和五十五年, こびあん書房.
- 2) 川端康成, 山の音, 昭和三十二年, 新潮文庫.
- 3) Yasunari Kawabata, Le Grondement de la montagne, traduit par Sylvie Regnault-Gatier et Hisashi Suematsu, 1969. Paris, Albin Michel.
- 4) Yasunari Kawabata, The Sound of the Mountain, translated by Edward G. Seidensticker, 1971, Tokyo, Tuttle.
- 5) 川端康成, 雪国, 昭和三十一年, 角川文庫.
- 6) Yasunari Kawabata, Pays de neige, traduit par Bunkichi Fujimori et Armel Guerne 1960, Paris, Albin Michel.

- 7) Yasunari Kawabata, *Snow country*, translated by Edward G. Seidensticker, 1957, Tokyo, Tuttle.
- 8) 三島由紀夫, 金閣寺, 昭和三十五年, 新潮文庫.
- 9) 田辺聖子, 大阪弁おもしろ草子, 昭和六十年, 講談社現代新書.
- 10) J. N. G. Le Clézio, *Voyage au pays des arbres*, 1984, Paris, Gallimard, (石井晴一編注, 駿河台出版社, 教科書版).
- 11) Michel Déon, *Un Parfum de jasmin*, 1967, Paris, Gallimard, (大矢タカヤス編著, 朝日出版社, 教科書版).
- 12) *Les Trois petits cochons*, 1968, Paris, Walt Disney Productions.
- 13) Jean de Brunhoff, *Le Roi Babar*, 1984, Paris, Hachette.
- 14) Sampé & Goscinny, *Cinq contes du Petit Nicolas*, 1964, Paris, Denoël, (窪川英水編著, 三修社, 教科書版).
- 15) 神沢利子・平山英三, ぼとんぼとんはなんのおと, 1980, 福音館書店.
- 16) *Sélection du Reader's Digest*, Mars 1988.

(昭和63年9月24日受理)

(昭和63年12月27日発行)